行 政 視 察 報 告 書

令和6年1月１０日

大町市議会議長　　二條　孝夫　様

大町市議会社会文教委員会
委 員 長　　山本　みゆき
副委員長　　宮 田　　一 男
委　　員　　植松　悠一郎
委　　員　　傳 刀　　健
委　　員　　太 田　　昭 司
委　　員　　西 澤　　和 保
委　　員　　中 牧　　盛 登
委　　員　　大 和　　幸 久

社会文教委員会行政視察を下記のとおり実施したので報告いたします。

記

１　期　日　　令和５年１０月２４日（火）から２６日（木）まで（３日間）

２　視察地及び視察事項
（１）岩手県盛岡市
　・もりおか歴史文化館
（２）岩手県紫波郡紫波町
　・オガールプラザ
（３）岩手県遠野市
　・こども本の森 遠野
　・遠野市立博物館

３　同行者　　福 祉 課 長　久保田　肇
　　生涯学習課長　藤巻　孝之

４　随行者　　議会事務局庶務議事係主任　倉科　貴大

５　視察概要　別紙のとおり

別紙

令和５年度社会文教委員会行政視察概要

１　岩手県盛岡市：もりおか歴史文化館

（１）事業の概要

盛岡市は、人口が約２８万３，０００人で、岩手県の県庁所在地であり、中核市である。

もりおか歴史文化館は、旧岩手県立図書館の建物を増改築し、平成２３年７月、盛岡城跡公園（岩手公園）の一角に開館した。盛岡城跡と城下町（中心市街地）を一つの大きな博物館（フィールドミュージアム）ととらえて、その活性化に貢献することを目指している。

歴史や文化に関する資料を収集・保存・公開する社会教育施設として、「歩いて楽しむまち盛岡」の新たな観光・交流拠点として、開かれたミュージアムづくりに努めている。

【展示内容】

◆１階　観光交流ゾーン

ア　町なか情報センター

盛岡特産品ブランド認証商品の紹介、旬の観光情報の提供、まち歩きのモデルコースの紹介、ミュージアムショップ

イ　祭り企画展示室

季節の祭り紹介、イベント、物販など

ウ　祭り常設展示室

チャグチャグ馬コ、盛岡さんさん踊りを映像で紹介、馬コの模型展示

エ　山車展示ホール

明治時代の山車「和藤内」と現代の山車「連獅子」の展示

◆２階　歴史文化ゾーン

ア　歴史常設展示室

①盛岡城築城以前
②城下町盛岡
③盛岡城と南部家
④南部家ゆかりの品々
⑤テーマ展示室
⑥近代の盛岡へ

イ　企画展示室

歴史や文化への理解を深め、新たな発見に出会えるような企画展を、年４回程度開催している。視察当日は、「罪と罰　犯罪記録に見る江戸時代の盛岡」の展示だった。

（２）主な質疑

Ｑ１　施設の、市内の児童生徒、一般市民への効果について教えていただきたい。

Ａ１　市内小中学校の全ての児童生徒が来館するかというと、そうではなく、４分の１程度である。理由は、小中学生の学習は、先人学習が中心であり、対象は明治時代以降の原敬などであるため。小学校３年生は、盛岡城跡の散策としてたくさん来館する。

Ｑ２　フィールドミュージアムという考え方についてお聞かせいただきたい。

Ａ２　盛岡市の４キロメートル圏内において「まち歩き」をするというコンセプトが、もりおか歴史文化館開館前からあった。散策することによって、盛岡を知ってもらうことを目的としている。

（３）所感（委員の感想）

山本委員長

１０月２４日、もりおか歴史文化館を訪ねる。快晴、岩手山が伸びやかな裾野を見せる。

盛岡市は人口２８万人余りと行政規模としては大町市の１０倍以上だ。それでも視察地として選んだのは、もりおか歴史文化館の成り立ちとあり方に興味を抱いたからである。

もりおか歴史文化館は、旧岩手県立図書館の建物を増改築し、平成２３年７月に盛岡城跡公園の一角に開館した。盛岡城跡と城下町（中心市街地）を一つの大きな博物館（フィールドミュージアム）としてとらえ、その活性化に貢献することを目指しているそうだ。

もりおか歴史文化館の役割は「継承」（未来の市民のために重要な資料を守り、歴史や文化を継承する）、「貢献」（観光と憩いを支援し賑わいを生み出し、地域の活性化に貢献する）、「創造」（学びの場として、将来を担う次世代を育み、新しい暮らし文化を創造する）、「成長」（生涯学習や市民協働の拠点として市民と共に成長する）としている。

もりおか歴史文化館の１階には盛岡の祭りや旬の観光情報が紹介され、２階には盛岡藩の歴史や南部家の至宝が展示されていた。城下町での江戸時代の暮らしを市民が演じているシアターが印象的だ。また城跡や周辺の中心市街地には、たくさんの市民や観光客が歩いており、新しい店舗と歴史を感じる古い店舗が入り混じり、魅力的なまちの賑わいを形成していた。もりおか歴史文化館は、歴史や文化に関する資料を収集・保存・公開する社会教育施設として、また観光・交流拠点として「歩いて楽しむまち盛岡」の中心としての役割を担っていた。

大町市の成り立ちは、古くは塩の道の街道である。まちの中心はどこなのか、何を中心として活性化していくのか、これからの課題である。

宮田副委員長

「もりおか歴史文化館」は、歴史資料（南部家等）の収蔵施設の老朽化に伴い、平成１１年より検討をはじめ、平成２３年に開館。旧岩手県立図書館を活用した建物となっていました。展示品は、盛岡藩の歴史や南部家ゆかりの品、盛岡の祭り展示コーナーがありました。

隣には盛岡城址公園があり、盛岡城は、その石垣の美しさから２００６（平成１８）年２月に「日本１００名城」【（財）日本城郭協会】に選定されたそうです。盛岡の歴史を伝える施設

にはなっている。

植松委員

もりおか・城と城下町フィールドミュージアムというコンセプトの元に、商店街と城址と博物館がコンパクトにまとまっていて、歩いて回ることができる。博物館で城や街の成り立ちを見た後に、また街を歩くことで、その場所、その場所の歴史を再度思い出すことができて、街歩き自体も楽しめる仕組みになっていた。

大町市でも、塩の道と商店街や若一王子神社など、物理的につながりのあるものがいくつかあるので、そこに歴史のストーリー性を持たせることで回遊性が生まれるのではないかと感じた。

傳刀委員

県都盛岡市の中心市街地を「歩いて楽しむ」を目的として造られた歴史文化館だけあって、特に城下町である中心市街地の歴史について、深く興味を沸かせる企画内容になっていると感じた。６万点の所蔵に対し、展示２００点を企画ごとに入れ替えるということで、企画を飽きさせない工夫もみられる。また、広いフリースペースが設けられており、学生たちの自習の場としてや、会話や待ち合わせの場としての「居場所」として活用されている。

教育への利用としては、夏休みの自由研究の発表というだけではなく、せっかくの郷土の歴史への造詣を深める施設なので、学校教育との連携が更に取れていると、もっと、地域に根付く子どもたちの感性が育まれるように思う。

太田委員

盛岡城跡公園内に位置し、木々に囲まれ、盛岡の歴史と文化を感じさせる施設。

この施設は、建築家、菊竹清訓氏の設計による旧岩手県立図書館を増改築したもので、その屋根は、岩手山に模した形状で、非常に美しい。

このように、世界的な建築家によって設計された施設を解体するのではなく、その文化遺産としての価値を正しく認識し、保存し、活用する事例として、非常に参考になる。

また、施設内の展示も、盛岡の歴史に対する深い理解と愛着を感じる内容だった。レイアウトや企画展の名称等も非常に凝っており、来場者を惹きつける魅力的なものであると感じた。

大町市の文化財センターは、貴重な文化財を保存するためには、あまりに心細い施設であり、建て替え等を考える時が来ている。今後、文化財センターを建て替え、またはリニューアル、移転する際は、文化財の保存と活用の両方を意識した施設とするべきであると考える。

大町市の今後の生涯学習の取り組みを考える上でも、非常に参考になった。

西澤委員

地域の伝統や文化を分かりやすく展示しており、地域と人の文化がよく表されていた。企画展を開催しており、企画展の反響もあることで、入館者の増進が図られているということから、企画力が入館者の増進を促すことも含め、重要なことであることがうかがえた。

中牧委員

盛岡市の成り立ちや盛岡出身の偉人、お祭り等の文化や食文化など、それぞれが生まれた背景などがわかり易く展示されていました。

チャグチャグ馬コの模型なども展示されており、立体展示も見応えがあり、映像の展示もよく出来ている歴史文化館でした。

当市が、盛岡市のように指定管理料１億１千万円の支出や人員配置等々、参考にすべき点は難しいと考えますが、今後は、大町市の山岳博物館等においてデジタル技術を活用した情報提供のあり方や体験方法等について、検討すべきだと思います。

大和委員

盛岡地域の歴史及び文化に関する資料収集、保存、展示によって、市民の教育や文化の向上を図る社会教育施設という位置付けであるが、観光の拠点施設として、「祭り」をテーマに祭りの映像など、見応えのある内容となっていると思う。罪と罰企画展も充分な調査に基づいていると思われ、学芸員の力量が解る施設であった。

概要説明

祭り常設展示室

歴史常設展示室

施設外観

２　岩手県紫波郡紫波町：オガールプラザ

（１）事業の概要

紫波町は、昭和３０年に１町８村が合併して誕生した町で、岩手県の中央に位置し、人口は約３万３，０００人である。

オガールプラザのあるオガールエリアには、官民複合施設であるオガールプラザ、民間複合施設のオガールベース、町役場庁舎、オガール保育園、宅地分譲地であるオガールタウン、フットボールセンター、公園などがある。オガールプラザには、公共施設として図書館、地域交流センター、子育て応援センターが入っている。また、民間施設として、産直、歯科クリニック、眼科クリニック、カフェ、居酒屋、学習塾、事務所が入っている。

オガールプロジェクトは、紫波中央駅前都市整備事業のことであり、「オガール」とは、「成長」を意味する紫波の方言「おがる」と「駅」を意味するフランス語「ガール」を組み合わせた造語である。紫波中央駅前を「紫波の未来を創造する出発駅」とする決意と、このエリアを出発点として紫波が持続的に成長する願いを込めて「オガールプロジェクト」と名付けた。

平成１０年、のちにオガールエリアとなる日詰（ひづめ）西地区の近くにＪＲの新駅である紫波中央駅が開業し、その年に町は、公共施設や宅地分譲の用地として１０．７ヘクタールの土地を先行取得したが、その後、塩漬けとなっていた。オガールプロジェクトでは、「町民の財産である町有地を安売りしない」ことを目的として、不動産に付加価値を付けて価値そのものを増大させることを目指した。平成１９年、町は「公民連携元年」を宣言し、平成２１年に公民連携基本計画を策定、同年にオガール紫波株式会社を設立した。平成２２年、オガールプラザ株式会社を設立し、塩漬けとなっていた町有地にオガールプラザを着工、平成２４年６月にオープンした。

令和４年度のオガールプロジェクトの実績は、オガールエリアにおいて２７６名（役場職員を除く）の雇用を生み、オガールエリアに８１万７，０００人が訪れて、視察受入は１１３件だった。

（２）主な質疑

Ｑ１　オガールプロジェクトは、東洋大学と連携していたとのことだが、東洋大学の果たした役割については、どのぐらいの評価か。

Ａ１　我々の官民連携のそもそもの発想は、東洋大学の発想である。この場所で公民連携の開発を行うことになった際に、町と東洋大学大学院とで協定を締結し、公民連携の開発ができるか、可能性調査を行なった。初期の重要な調査で、平成１９年５月から８月において集中的に行った。

この調査では、我々も知らなかった数字もあり、それによって気付かされたこともあった。例えば、半径３０キロメートルの圏域人口というものが示された。この圏域人口の半数は、オガールエリアの来訪者として集めたいという考えがあった。他の圏域人口と比較すると、例えば盛岡市は、北の方は過疎地である。紫波町は、南に元気のある北上市や花巻市が入るので、圏域人口は一番である。仙台市や一関市よりも圏域人口が多い。平成１９年当時の岩手県の人口が約１２８万人だったが、その半数程度は圏域に入ることが分かった。

Ｑ２　オガールエリアへの来場者は、実際に町外から来るのか。
Ａ２　そのとおり。図書館は、会員登録が必要となるが、約３割が町外の方なので、そこから類推し、来訪者の３割は町外から来訪していると考えている。

Ｑ３　オガールタウンにおける建築の指定事業者は１３社であるが、下請けまで含めての数字か。
Ａ３　１３社は全て建築会社であり、下請けは使わず、自分たちでやった。

Ｑ４　オガールタウンの１区画当たりの価格はいくらか。
Ａ４　駅に近いところは、７０坪で約１，１００万円であり、駅から一番遠いところが７０坪で約８８０万円である。建物が約２，５００万円から２，８００万円なので、土地と併せて約３，５００万円から３，８００万円である。

Ｑ５　オガールタウンの建物には「年間暖房負荷」や「相当隙間面積Ｃ値」等の条件があるが、条件を満たすための指定事業者の技術に差はあったのか。技術的な指導は誰が行ったのか。
Ａ５　建築の基準は、「紫波型エコハウス基準」である。その基準を作る時に関わった、オガール・デザイン会議の竹内委員が中心となって研修会を行った。建物の完成検査は、竹内委員や町の建築部門の担当者が行った。

Ｑ６　旧商店街である日詰商店街の建築会社を使うなど、旧商店街にお金が回るような仕組みを考えたか。
Ａ６　特に考えなかった。

Ｑ７　オガールプラザにおける民間のテナントの賃料はいくらか。
Ａ７　月額、坪５，０００円である。入居する企業は、１０年間は退居できない。その代わり、１０年間は賃料を値上げしない条件である。

（３）所感（委員の感想）
山本委員長
　１０月２５日、本日も快晴。マイクロバスに乗り込み、盛岡を後にする。市街地を抜け、北上川が流れる北上盆地を南下する。広々とした平野で稲作や畑、畜産も見られる。小岩井農場は岩手県の代表的な企業だ。
　１時間ほどで紫波町に到着。人口は３万２千人余りと行政規模は近しい。主な産業は農業でもち米の産地、またリンゴやブドウ、洋ナシなどの果樹栽培、紫波もちもち牛、しわ黒豚など畜産も盛んだ。目的地はオガールプラザ、ＪＲ紫波中央駅から徒歩２分、まだ新しい住宅街が印象的だ。
　紫波町は、ＪＲ紫波中央駅前の１０．７ｈａを中心とした都市整備を図るため、町民や民間企業の意見を伺い、平成２１年３月に議会の決議を経て、紫波町公民連携基本計画を策定した。この基本計画に基づき、平成２１年から始まった紫波中央駅前都市整備事業が「オガール

プロジェクト」です。オガールの名前の由来は紫波中央駅前（紫波の未来を創造する出発駅とする決意）とフランス語で「駅」を意味する「Ｇａｒｅ」（ガール）＋紫波の方言で【成長】を意味する【おがる】＝このエリアを出発点として、紫波が持続的に成長していく願いを込めたそうです。

オガールプロジェクトの研修ではキーパーソンとなった前市長（藤原孝・企業人）とこの地域の未来構想を描いた岡崎正信氏との管民連携について学ぶ。その後の見学では、官民複合施設を見学した。しかし、施設というより一つのまちだ。周辺には新しい住宅地が広がる。人口が社会増をしていることも頷ける。大町どうする？

宮田副委員長

紫波中央駅前都市整備事業は、未利用（塩漬け）となっていた町有地に、老朽化していた庁舎（昭和３８年建設）の整備と合わせて、図書館・保育園・交流ホール等を併設し、テナントに、ホテル・歯科クリニック・産直等の施設が入っている事業です。

民間資金活用・官民連携事業の成功例として、全国から視察があるそうです。

・感じたこと

① 地元産木材の使用、地元企業の出店数に合わせた建設規模の設計、地元農産物の販売など、地元の自然環境や産業を生かした政策を町が持って、計画した。

② 資金面でも、地元産木材の使用事業として国の補助金を受け、「岩手県フットボールセンター」の整備は、県の事業で実施。

③ 未使用町有地を宅地分譲した事業は、環境保全と山林や間伐材の活用を視野に入れた「紫波型エコハウス基準」に合わせた住宅整備を進め、林業振興や環境保全という町としての政策を貫き、地域循環型の経済にもなっている。

④ これらを実施する上で、民間の法人や人材、資金をうまく活用している。

植松委員

行政が大きく関わった事業であるにもかかわらず、非常に目的意識のはっきりした計画で、箱モノが出来上がった後も、しっかりと自立している点に驚いた。

計画自体も非常に魅力的ではあるが、「成功して当たり前・失敗すれば倒産の危機にさらされる可能性」のある民間が手掛ければ、うまくいくのは当たり前ではあるが、それを行政がしっかりと関わったうえで実現させたことに、目標設定の大切さを再確認できた。

大町市では、数えきれないほどの様々な計画が策定されているが、それらもより具体的な目標値を設定すれば、計画の実現性が大きく高まるのではないかと感じた。

傳刀委員

新興住宅地の開発と、新駅の誘致と併せ、町役場含め地域に必要とされる施設がコンパクトに形成されていた。官民連携による開発プロジェクトということだが、官と民それぞれの役割分担、携わり方、目的が綿密で明確化された基で形成された事業であると感じた。

創世期には、施設内分譲地の住宅建築等、現在は紫波マルシェの運営などにより、地域の様々な分野の事業所にお金が回る仕組みができていることがわかる。また、広い芝生のフリースペースや、アリーナ、スタジオ、図書館が充実しており、子供たちはじめ地域の方の居場所づくりとして、よく考えられた施設である。

太田委員

公民連携（ＰＰＰ）によるまちづくりの成功例として有名なオガールプロジェクト。

その中心拠点となるオガールプラザには、図書館、地域交流センター、子育て支援センター、診療所、商業施設等がある。また、敷地内には、広場、町役場、薬局、レストラン、地域で必要なもののほとんどが、このオガールで手に入る。

そして、敷地内のすべての建物のデザインは統一され、非常に美しい。ここに来ると、まるで海外に来たかのような錯覚に陥る。人が集まる仕掛けづくりが本当に素晴らしい。

このプロジェクトの当初から、東洋大学ＰＰＰ研究センターが関わり、またさらには、設置されたデザイン会議には、建築デザインやランドスケープデザインの業界等で抜群の知名度を誇るメンバーが名を連ねている。

また、このプロジェクトの核には岡崎正信氏（株式会社オガール代表取締役）がいる。

非常に魅力的な施設であり、ぜひ大町市でも同じような取り組みを行うことができたら素晴らしいが・・・。人材が大事であると感じた。

西澤委員

オガールプロジェクトの創生について、民間のキーマンと行政のキーマンとの強力なタッグのもと、官民プロジェクトとなっていることから、事業の在り方そのものが官主導型との違いとなっている。運営の在り方も法人化されていることで、行政の財政負担が軽減されている。

それぞれが特徴的な事業展開となっていることや、地場産品の販売と施設運用などもリンクされていたりと、地域との結びつき等の面からも採算性、収益性も十分である様子がうかがえた。

中牧委員

・紫波町は、公民連携によるオガールプロジェクトのもと、年間９０万人が訪れるエリアをつくることに成功した。

・官民複合施設（オガールプラザ）には、図書館などの公共施設の他、飲食店や産直市場など民間のテナントが入っている。そこには、確実に集客が見込める、稼ぐインフラづくりを実現していた。

・当市として、人口減少対策、そして稼げる自治体を目指すために、官民連携手法を導入して効果を求めるような、大きな事業計画がないことが残念だ。

大和委員

公民連携によるまちづくりの事例であり、これによる新たなまちづくりの実例を見ることができた。東洋大学の「ＰＰＰの定義」に基づく「オガール・デザイン会議」を中心にしたまちづくりとなっている。

紫波中央駅前の町有地を中心にした、新しいまちづくり手法は、大いに参考になると思われる。新しいまちづくりから取り残される旧市街地等の今後のまちづくりの構想など、紫波町全体のまちづくりも研究の余地がある。

概要説明

オガールプラザ（子育て応援センター）

オガールプラザ（図書館）

オガールプラザ（産直）

オガールプラザ外観

オガールベース

３　岩手県遠野市：こども本の森 遠野

（１）事業の概要

遠野市は、岩手県の内陸部に位置する人口約２万５，０００人の都市で、柳田國男の「遠野物語」で知られている。

「こども本の森 遠野」は、世界的建築家、安藤忠雄氏の安藤忠雄建築研究所が事業費の大部分を負担し、築１２０年の呉服店を改築し、遠野市に寄附した建物である。本館は、木造２階建て、延べ床面積４９８平方メートル、高さ４．５メートルの壁面の本棚に約１万３，０００冊の本がテーマごとに並んでいる。また、土蔵が２棟あり、イベントや地域活動等に利用している。

「こども本の森構想推進事業」は、「本とふるさと　未来へつなぐ　文化復興拠点」をコンセプトとしている。「こども本の森 遠野」は、多様な生きものがともに暮らすことで、むくむくと育っていく豊かな森のように、さまざまな人や本が集まり、創造力と想像力を育む場となることを願って造られた。一冊にじっくりと向き合い、集まる人との出会いを楽しみ、新しい世界に触れ、感じたことを発信する、訪れる人それぞれが、本のある空間を思い思いの過ごし方で楽しむ文化施設となることを目的としている。

令和元年７月、安藤忠雄氏から遠野市へ「こども向け本の施設」を寄贈したいとの申し出があり、同年１１月、遠野市は「こども本の森構想推進準備室」を設置した。令和２年９月、遠野市議会９月定例会において「負担付き寄附を受けることについて」を議決し、同年の１２定例会において、「遠野市こども本の森遠野条例」を議決した。令和３年６月１５日、安藤忠雄建築研究所から遠野市への寄附採納式及び建物引き渡しを行い、同年７月２５日、「こども本の森遠野」オープニングセレモニーを開催し、約３００人が来場した。

施設の利用は、１日４回の入替制となっている。運営体制は、市が（一財）遠野市教育文化振興財団に業務委託をし、その職員が常時３～４人、そして遠野市の職員２人で運営している。財団では、生涯学習講座等運営支援業務（来館者の受付・案内、講座の開催等）及び子育て支援拠点事業を実施している。保育士が２人おり、未就学児親子向けのイベントを毎月開催するなど、事業を行っている。

（２）主な質疑

Ｑ１　開館後の経過についてお聞かせいただきたい。

Ａ１　令和４年度の来館者数は、約２万１，０００名だった。令和５年度は、開館から２年が経過し、来館者数は落ち着いてきており、約４パーセント減少している。開館した年の令和３年度は、県内の全小学校へ案内のチラシをした。令和４年度は、東日本大震災で被災した、岩手県沿岸南部の保育園の保護者へチラシを配布した。開館時はコロナ禍であったが、今年度は５類へ移行し、来館者も増えると予想されるので、このチャンスを逃さないようにしたい。

Ｑ２　この施設の、児童生徒及び一般市民に対する効果についてお聞かせいただきたい。

Ａ２　令和４年度、５年度の来館者のうち、市民の割合は３３パーセントなので、若干割合が低いように思われるかもしれないが、この施設は市民向けの施設ではなく、むしろ県内・県外からも継続して来てもらいたい施設である。

また、遠野市は面積が広く、昭和の大合併時の旧１１町村それぞれに小学校があり、この施設にすぐに来られる近くの小学校は１校だけなので、その他の小学校の児童は、親に連れてきてもらわないと来られない。

イベント情報などの発信は、広報紙、ケーブルテレビ及びＳＮＳにより行っており、ＳＮＳを見て、車で１時間くらいかかる盛岡市、花巻市及び北上市から来る方もいる。老人クラブに声をかけて、孫を連れて来てほしいとの呼びかけもしている。

Ｑ３　この施設の、まちづくりにおける効果についてお聞かせいただきたい。

Ａ３　この施設で小規模な郷土芸能発表会などのイベントを行ったり、土蔵において、体操教室や、若い人のライブも行ったりしている。この施設から遠野駅に向かって、２本の大きな通りがあるが、そこに５つの商店街があり、そこでイベントのポスターを掲示していただいている。

この施設は文化施設であるが、来館者を他の観光施設へ誘導するような観光戦略における位置付けについて、現在検討中である。

Ｑ４　この施設は、古い建物を再生しているが、市で買い取ったのか、借りているのか。事業費としては、どの程度か。

Ａ４　市で買い取った。建物については評価ゼロで、土地を買い取った。事業費は、合計で約２億円である。財源のうち、半分くらいは県からの補助金である。

Ｑ５　市議会における議論の経過についてお聞かせいただきたい。

Ａ５　この施設については、市議会においてかなり時間をかけて議論した。

図書館との住み分けについて、当局からは、「『こども本の森』は本を貸し出さないが、図書館は貸し出す。『こども本の森』は図書館への案内をアシストする役割だ。」との説明があった。

子どもの見守り事業として、当局からは、「来館した子どもにここで遊んでもらうとか、イベントを開催するだけではなく、家庭内などの悩みを抱えた子どもに気付き、相談にも対応するなどの活動も行う。」との説明があった。

先ほど、約２億円の事業費との説明があったが、その内、建物内の本棚は、市の予算で負担し、６，０００万円から７，０００万円かかった。その他、不足する本の購入に約５００万円、この建物の外観やエクステリアに１億円近くかかっていると思う。

この施設は遠野市だけでなく、東日本大震災で被災した沿岸地域の子どもたちにも夢を抱いてもらうための施設であるとの安藤氏の思いがあったので、沿岸地域の子どもたちをここへ誘導する方法などについて、時間をかけて議会で議論した。

Ｑ６　ランニングコストについてお聞かせいただきたい。

Ａ６　令和５年度は、予算ベースで約２，１００万円である。令和４年度決算は、約２，２００万円である。これには、市の職員２名の人件費は入っていない。いずれは、この施設を指定管理にしていきたいと考えている。

Ｑ７　遠野市には、観光施設や博物館が多くあるが、ランニングコストがかかる。他の施設との住み分けについて、議会ではどのような議論をしたのか。

Ａ７　賛成、反対で割れたところもあったが、最後はやはり「子どもたちの夢のため」と考えると、費用対効果という数字で測れるものではなかった。震災復興の時も、遠野市は沿岸地域の後方支援として様々な支援を行ったので、その延長として考えると、「何が何でも反対」というところまでは行けなかった。遠野市は公共施設がかなり多いため、利用が少ない施設は順次閉じていく計画を持っており、そちらの財源を削減して、本当に必要な部分に充てていこうとしている。しかし、なかなかスピード感を持って進めていないのが現状である。

Ｑ８　育てる会について、メンバーの年代構成についてお聞かせいただきたい。

Ａ８　代表者は、７０代半ばくらいで、その下が６０代くらいで、一番若い方が４０代くらい。Ｉターンの人が多い。

Ｑ９　本の選書・配架は、ブックディレクターの幅允孝（はばよしたか）さんが行ったとのことであるが、その後も幅さんに関わっていただいているか。

Ａ９　最初だけ幅さんにやっていただいて、その状態をまだ維持している。その後もお願いした場合は、委託料がかかる。寄附していただいた本がまだ１，０００冊あり、現在３名で、その配架準備をしている。

Q10　４回の入替制で、定員を５０名としていることについてお聞かせいただきたい。

A10　「こども本の森 中之島」を参考に、入替制にした。中之島は、入替制にしないと次の人が入れない。入替制にすれば団体の予約が取りやすく、ゆっくり見たい人が安心して見られるというメリットがある。予約がわずらわしいという声もあるが、今は予約なしでも入館できる。

（３）所感（委員の感想）

山本委員長

１０月２６日、遠野での朝は深い霧に包まれる。ここは山に囲まれた盆地であることを実感する。宿泊地からほど近い「こども本の森　遠野」へ。はじめに、こども本の森 遠野について研修を受けた。

東日本大震災のあと１０年間、世界的建築家の安藤忠雄氏は発起人となり東北３県に育英資金を寄せていた。その中で「東北復興のシンボルは子どもたちの未来である。子どもたちのためには本・読書が大事ではないか。」という想いと遠野市の子どもたちの居場所づくりと遠野への愛着心の育成、遠野の文化発信拠点をとの思いがリンクし、古民家再生という形でまちなかに令和３年、こども本の森がオープンとなった。しかしながら、一長一短があり、遠野市議会では難しい議論があったと、教育民生常任委員長の佐々木恵美子氏より伺った。追加予算が何度も行政側から提出され、その度に議論となったそうだ。

佐々木氏とお話ししながら、こども本の森を見学した。市内に小学校が１１校あり、再編は進んでいない。大町市の学校再編はうらやましいと聞く。遠野市は大町市より財政難だ。健全

財政化に取り組んでいる。遠野市の令和５年度の一般会計予算は１８９億５，０００万円、驚くのが事業数だ。令和５年度は３６５事業、うち新規事業は２６事業。多ければいいとは思えない。また、商店街が４つある。昨夜、夕食後に歩いてみたが、大町市よりさらに寂しいまちなかの様子である。

遠野市の人口は２万４千人余りと、大町市の２万５千人余りとほぼ同じである。

新しい文化振興拠点として立ち上げた「こども本の森 遠野」。残念ながら、周辺地域への経済的な波及の様子は今回、見ることが出来なかった。しかし、こども本の森のスタッフの皆さんには毎日のように訪れる地域の子どもたちへの愛情に溢れていた。観光拠点として、観光客も夏場には多いと聞く。遠野の未来投資を見聞きし、大町のこれからを思わずにはいられない。

宮田副委員長

遠野市内で、空き家となっていた呉服店（築１２０年）を改築し、開設された施設。館内に入ると、壁全体に本が並び、まさに本の森にいるような印象を受けました。本を展示するアートとしては、見る価値はあると思うが、市民が日常的に利用するかというと、圧迫感があるように感じた。当初は、物珍しく県外や市外からの来訪者もあると思うが、１０年先を見てみたい。

また、遠野市には、「ふるさと村」や「とおの物語の館」など多数あり、それらとの差別化ができるかどうかも課題ではないかと感じた。

植松委員

いまいち、何を目指しているのかが見えづらい施設であった。オガールプラザとの対比で、さらに目的意識や目標設定の大切さを確認することができた。

大町でも、前年踏襲でなんとなく続けている事業がある可能性を、全部は否定できないので、各事業をしっかり精査し、効果や目的のはっきりしないものは切り捨てる必要があるのかもしれないと感じた。

傳刀委員

遠野市は、遠野物語で有名である。本の森事業をなす上で、世界的建築士 安藤忠雄氏から、相当な寄付があったと説明にあったが、まちづくりや子育ての理念に物語性と市行政の誇りを強く感じる。子供たち育成の上で、事業の必要性について思いを伺ったが、来場者の多くは他市からが多いということで、観光の面でも大きな役割を果たしていると感じた。実際に大人たちであっても、その圧倒的な書籍数に魅せられると同時に、「本の森」内を散策するのに童心に帰らざるを得ない、安藤氏の緻密な設計を体感することができた。

太田委員

世界的建築家、安藤忠雄氏の設計による「子ども本の森　遠野」。施設の外観はもとより、その内観の素晴らしさ！

旧呉服店の木造の外観を生かしつつ、内部は１階と２階を繋げた吹き抜け構造の広い空間を使って壁一面に本を陳列。子どもたちが壁一面の本に囲まれながら読書に耽る姿を想像すると、ワクワクしてくる。この施設を寄贈した安藤忠雄氏の東北の復興に対する熱い思いが伝わってくる。

この施設は「図書館」ではないため、本の貸し出しは行っていない。あくまで、子どもたちが本に触れるための「居場所」であり、また、大人も本に囲まれながら過ごすことのできる居場所でもある。

デジタル時代に生まれた子どもたちにとって、今、最も必要なものが、「本」に触れる時間だ。ＩＴ端末の液晶画面が、子どもたちの「目」「脳」「心」に与える影響を危惧する、学術的な報告も多く出ている。そして、液晶画面によって負の影響を受けた子どもたちの心や体を修復する大きな効果が期待されているのが「読書」である。その効果についての研究報告もある。

子どもたちがどうしたら本に親しむことができるか、そのための工夫が求められている今、このような取り組みは非常に参考になる。

西澤委員

建築家の意向が反映されていることから、景観や内部設計などにおいては計算されたものがある。地域の拠点整備の一環としての機能や、子育て世代などにも利活用がされていることがうかがえた。

貸し出しの担当職員が保育士ということからも、親子でといった施設利用にも優しい取り組みであることに感心した。

「負担付き寄付」という施設であることから、今後の運営についての足かせとなることはないのか、疑問を感ずるところでもある。

中牧委員

図書館としてだけでなく、建物としても魅力的でした。子どもだけでなく大人も楽しめる場所でした。当市として参考としたい点はありません。

大和委員

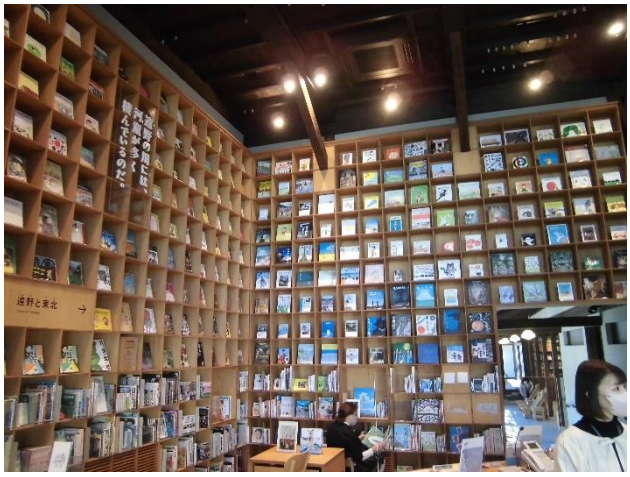
建築家、安藤忠雄氏の意向を中心に受けて設立された「こども本の森　遠野」である。未来を担う子どもたちのために、本とふるさと未来へつなぐ文化復興拠点として運営されている。

施設のデザイン、本の並べ方など、今後の大町市の図書館運営には大いに参考になると思われる。

大町市全体のまちづくり構想を市民全体で深く太く練り上げた上に、将来の図書館づくりを進める必要があると思われた。

施設外観（こども本の森）

概要説明（いちの蔵）



施設内観（こども本の森）

施設内観（こども本の森）

４　岩手県遠野市：遠野市立博物館

（１）事業の概要

昭和５５年に開館した日本で初めての民俗専門の博物館である。平成２１年度に『遠野物語』発刊１００周年および開館３０周年を迎えたことをきっかけに、「『遠野物語』を機軸に遠野を見つめ直し、市民とともに地域の個性や資源の発掘、情報の発信、伝承文化の構築を目指す中核博物館」という新たなコンセプトのもとに全面的な展示改装工事（展示設計・施工：約４億２千万円、建築設計・施工：約２億６千万円）を行った。

建物は４階建てで、１、２階部分が図書館、３、４階部分が博物館の複合施設であり、図書館で得た知識を博物館で実証的に学び、博物館で学んだことを図書館の資料で裏付けするという、資料の相関性を生かした文化情報センターとしての役割をはたすことを目的としている。

中心市街地の観光と文化の拠点施設として、これまでに国内外から２１０万人以上が来館し、

市民の生涯学習活動や遠野を訪れる方々のビジターセンターとして親しまれてきた。令和４年度の来館者数は、約１万４，０００人。令和５年４月から９月までの来館者数は、約１万７，０００人である。

職員体制は、館長、副主幹（学芸員）、主査、資料取扱補助員（学芸員）が各１人の４人体制である。

平成２６年度からは、柳田國男の出身地である兵庫県福崎町との交流として、文化交流、物産交流、児童交流などを行っている。

【展示内容】

◆第１展示室「遠野物語の世界」

ア　プロローグ「遠野へのいざない」

遠野へ通じる峠道をイメージしたプロローグ空間。

イ　マルチスクリーン・シアター「遠野物語の世界」

「遠野物語」や背景にある民話を題材にした大画面の映像シアター。映像には、有名な声優、野沢雅子さんも出演している。

ウ　遠野のなりたち

中心には遠野市の地形ジオラマ・スクリーンがあり、遠野の創世神話と多くの不思議な言葉が沸き上がる様子が表現される。周囲には、原始から近代までの歴史と伝説を物語る資料を展示している。

◆第２展示室「遠野　人・風土・文化」

ア　町

明治から大正時代頃の市日でにぎわう通りをイメージした展示。「町のにぎわい」シアターでは、大人や子どもの遠野市民が遠野弁で熱演している。

イ　里

昭和３０～４０年代、遠野で暮らす家族の１年を描いた、全長７メートルのジオラマを中心に、民俗写真と実物資料により、厳しい自然と向き合って生きてきた里の暮らしを展示している。

ウ　山

山仕事や山伏、早池峰（はやちねさん）山信仰の資料を展示している。人々が山の中で感じた恐れと自然の神秘を音響により表現し、想像力によって実感してもらう。

◆第３展示室「企画展示室」

定期的な企画展示や博物館活動の成果などを展示している。

（2）主な質疑

Ｑ１　この施設には、どのくらいの費用がかかったか。

Ａ１　当初の建設は昭和５０年代であるが、当時で約４億円かかった。平成２１年度のリニューアルにおいて、展示部門で約４億円、設備部門で約３億円かかった。現在のアニメーションは平成３１年に制作しており、約１，６００万円かかった。アニメーションは、５年から１０年程度のスパンで新しいものを制作しており、費用は約１，０００万円から２，０００万円程度かかっている。

Ｑ２　施設の維持費はどの程度か。

Ａ２　空調等は図書館とセットであるが、設備関係の費用が年間約２，０００万円である。その他、人件費や事業費が別途かかっている。

Ｑ３　学芸員は、何人いるのか。

Ａ３　当博物館には、私（副主幹）と非常勤職員が１人いる。その他、市史編さん室や文化財担当の学芸員もいるので、全部で５人である。

Ｑ４　シアターの映像に市民が出演していたが、どのような方か。

Ａ４　「遠野物語ファンタジー」という市民の舞台を毎年２月に開催しており、その出演者に出演をお願いした。

Ｑ５　遠野は、どのような町なのか。

Ａ５　遠野の町は、城下町として約４００年栄えてきた。「こども本の森 遠野」のあたりは、「一日市商店街」で、市があった。

Ｑ６　来館者のうち、観光客の割合はどのくらいか。

Ａ６　８割程度が県外の方である。民俗学や遠野物語に興味のある方が来館する。遠くは関西や九州からも、多くの方が来られる。

（3）所感（委員の感想）

山本委員長

こども本の森 遠野の視察を終え、徒歩にて遠野市立博物館へ向かい、５分ほどで到着する。建物の１階が遠野市立図書館となっており、２階へ上がると遠野市立博物館となっている。

学芸員さんに案内していただく。薄暗い館内、遠野の風景や神仏の姿が幻想的に映し出され、一気に柳田國男の「遠野物語」の世界に引き込まれていく。マルチスクリーン・シアターでは「ざしきわらし」の民話がアニメーションで映し出される。まるで遠い昔にタイムスリップしたような感覚になる。学芸員さんの熱心な、そして自信に満ちた話しぶりで、展示を見ながら遠野の成り立ちを「遠野物語」から読み解いていく。遠野の民話は場所や人物まで、歴史のなかで特定できるのだという。物語の世界と実際の暮らしが結びついていくような不思議な感覚だった。ただ単に展示物を見るだけでは、ここまで引き込まれないと思う。学芸員さん

の見識や遠野への愛着、また魅力的な話しぶりが博物館の魅力を何倍にもしたようだ。当館は平成２１年に７億円の予算をかけてリニューアルを行っている。「遠野物語」の魅力を伝えるにふさわしい博物館であった。

遠野市は三陸海岸のまちと、盛岡や花巻、北上などの内陸のまちをつなぐ交通の要衝であったことから、かつては賑わい栄えた。昔は物流と共に人流も生まれていたのだと展示内容から感じた。現代は、物流こそ飛躍的に効率化されたが、同時に人流は必要がなくなったということなのだ。新たな人流を作るには、人が訪れる理由を作らなくてはならなくなっている。「遠野市立博物館」のリニューアル、まちなかの「こども本の森　遠野」の開館に今の遠野を生きる必死さが伝わってくる。大町市も海と山をつなぐ「塩の道」の街道のまちだ。遠野と同じ問題を抱えている。人流を起こすには、大町市に来たくなる理由を作らなければならない。「大町市と言えばこれだ。」「大町市と言えばここだ。」即答できるものを作らねばと思う。

宮田副委員長

遠野の歴史を紹介し、図書館も併設されている。遠野の歴史を知るには、訪れる必要がある施設とは感じた。遠野物語の世界を紹介するシアターがあったが、他にも同様の施設がある。

植松委員

所蔵も多く、年に何百点も入れ替えを行ったり、企画展示もうまく集客に成功しており、市民からも愛された博物館であると感じた。前日に数名の市民と交流する機会があり、「あそこは面白い。」と口をそろえておっしゃられていたのが印象的。

大町にはいくつも博物館があり、各館で知恵を絞った企画がされているが、集客を目的として、ターゲットを絞ったマーケティングの観点を入口とした企画の仕方を取り入れることも、選択肢の一つに入れていただければ、よりよい運営に繋がるのではないかと感じた。

傳刀委員

開館４０周年を経過した、日本で初めての民俗専門の博物館。平成２２年に全面リニューアルされた。単に市の歴史文化を伝えたり、展示したりするというだけでなく、遠野物語の世界観と市の歴史を見事に融合させ、市の歴史に対する、遠野市や市民の強い誇りを知ることができた。

また、学校教育にも十分に取り入れられていて、教員を対象とした教室を開催したり、展示物を実際に触れさせたりと、子どもたちに郷土に対する興味や誇りを抱かせるのに十分に機能している。

来場者の多くは観光客が多いということで、有名な「本の森」との相乗効果が相当にあるようにみられた。

太田委員

柳田國男の『遠野物語』の里、遠野市の歴史と文化を伝える遠野市立博物館。

岩手県の真ん中に位置する花巻市と沿岸部の釜石市、大槌町との中間にある遠野市は、内陸の文化と沿岸部の文化が交流する要衝のまちとして栄えた。遠野を訪れた柳田國男は、遠野の印象について「山奥には珍しき繁華の地なり」（『遠野物語』）と述べているが、その意味がよくわかった。

遠野市立博物館の展示の質、量、ともに素晴らしい。遠野市の歴史がよくわかるとともに、『遠野物語』について、その展示内容の詳細さに感動した。『遠野物語』で語られる各物語の舞台となった、遠野市内の具体的な地域を地図上に示し説明した展示には興奮した。河童、天狗、山男、山女・・・。これら未知の存在についても、本当にいたのかもしれないと思わされた。

大町市は、山岳都市としてのまちづくりにも取り組んでいるが、山岳都市として、もっと踏み込んだ大胆な取り組みも必要ではないか。全国の遠野物語ファン・柳田國男ファンが遠野に訪れた時、遠野市民の強い「遠野愛」に触れることができる。そういうまちづくりを遠野は行っている。同じように、大町市に来られる山岳ファンが、大町市民の山に対する強い愛着に触れることができるようなまちづくりが、今、最も求められているのではないか。特色あるまちづくりとは、そういうことだと感じる。

生涯教育の施設としての山岳博物館の展示についても、さらに充実したものとなることを願っている。

西澤委員

展示の方法がとにかく興味をそそり、それぞれの展示に注目して見学してみたいといった思いに駆られた。遠野物語といった地域の文学作品における、特徴ある展示や表現の仕方も、見学者を飽きさせない展示方法だと感じた。学芸員についても、施設と学芸員の知識や見識の高さがうかがえる。企画展についても、学芸員のビジョンを持った企画が、入館者を誘引する元にも繋がっているのではないかと感じる。

中牧委員

遠野市立博物館は、日本最初の民俗専門の博物館として開館した。展示も凝っていて見応えを感じましたが、ここの一番の売りは副主幹でした。遠野の人々の自然や暮らし、文化や歴史を熱く語る姿に感じいったところです。

大和委員

遠野地方の文化、歴史を展示する、すばらしい博物館と感じた。遠野を訪れる観光客にとっても、遠野を新たに発見できる施設となっている。博物館の運営に携わる、学芸員の力量や行政の実行力の高さが伝わってくる施設であった。

「町」の展示

「里」の展示

「里」の展示

「里」の展示（ジオラマ）